

幼少年期の自然体験の意義とその回復策について

— 「さんさん幼稚園」の活動を通して —

蘭 田 碩 哉

生活福祉学科教授

子どもたちの自然体験が一時代前に比べて減少していることは、各種の調査に現れているし、実感としても明白であろう。筆者自身のことを考えてみても横浜の下町育ちとは言え、1950年代には身近に自然が豊かに存在した。商店街の後ろの丘には松林が広がっていて、その藪の中に秘密の基地を作ったり、戦争ごっこに興じたりした。自転車で少し走れば田んぼと小川と雑木林の続く田園風景で、1年を通じて虫を追い、魚を捕り、木の実を拾って遊ぶことができた。そのあたりは今や新横浜駅周辺の市街地になって、かつての面影は消え失せてしまったが、四季折々の自然と関わって過ごした子供時代の記憶は鮮明である。

自然体験の減少が子供の心身の成長やその後の生活観にどのような影響を与えるのか、このことを実証的に追求するのは必ずしも簡単ではない。しかし、昨今の子どもたちに顕著に見られる身体能力の低下や心の荒れのような現象が、自然体験の後退と深く関連しているであろうことは、十分に予測される。また、そうした仮説のもとに自然体験の価値を立証した研究も現れている。筆者もまた幼少期の自然体験に大きな意味を見いだす一人として、「自然を友とする幼児教育」の実践活動に関わってきた。その体験を通してこのテーマを重要性について問題提起を試みたい。

1. さんさん幼稚園の活動

町田市北郊、小野路町は多摩丘陵の台地とそれを雨水が浸食した谷間（ヤト）とからなる。台地にはクヌギやコナラを主体とする豊かな雑木林が広がり、ヤトにはかつては段々になった小さな水田が連なっていた（現在はほとんどが放棄されて藪になってしまった）。さんさん幼稚園はそんな自然を舞台に30年近く独自の幼児教育を



山でのお弁当

追求してきた。

「さんさん教育」の基本方針のひとつが「自然は友達」ということである。園のパンフレットにはこう記されている。「小野路の里は東京とは思えないほど豊かな自然に恵まれています。この森と林が私たちの『園庭』です。春の野草、夏の昆虫、秋の木の実、冬の氷・・・それらをすてきな友達にして、さんさんっ子は思う存分、小野路の山を駆け回って育ちます。」

さんさん幼児園は認可された幼稚園ではなく（園庭の面積が基準に達しない、しかし、周囲の自然地はかけがえのない園庭なのだが、残念ながら園の所有地ではない）、いわばフリースクールの幼稚園版である。しかし、一風変わった幼児教育の場として、多摩ニュータウンでは支持する父母も少なくなく、発足以来 28 年間で 700 人ほどの卒園児を世に送った。正確にフォローした事はないが、卒園児たちは学業成績が抜群であるかは保証の限りではないが、運動能力は抜きんできている。四季を通じて毎日のように野山を駆け回り、さまざまな自然遊びに打ち込み、5 歳児の遠足は往復 12 km を歩き通すのだから、当然と言えば当然であろう。それよりも重要だと思われるのは、1 人 1 人が自分を見つける、自分らしくなるということである。園児みんながある水準に達するというような、工場の規格品ではなく、それぞれの園児がその子らしくなる、他の誰もいないその子としての個性と自律性を発揮するという事は、保証していいのではないかとと思われる。それこそが自然との深い関わりがもたらす教育的成果であると考えている。

2. 自然体験と「からだを使いこなす」こと

幼児期の自然体験、とくに自然の中での遊びに含まれる重要な要素は「身体を使いこなす」ということである。人間の赤ん坊はまことに無力な状態で生まれてきて、成長とともに身体の使い方を学習していく。1 歳には 1 歳の、3 歳なら 3 歳の使い方があり、それは一步一步広がり深まっていく。身体の各部分を十全に機能させ、その間の協調動作を 1 つ 1 つ確実に身につけていかなければ、自らの身体を使いこなせない、奇妙な大人になってしまう。実際、現在の子どもの中には、転んだときに手が反射的に前に出て顔面が地面に激突するのを防ぐというような、基本的な反射ができない子がいるという報告もある。

さんさん幼児園の活動を代表する遊びの 1 つに「里山の崖のぼり」がある。赤土が剥き出しの高さ 10 メートルほどの崖に取りついて登っていく遊びである。手前は緩やかな斜面だが登るにつれて急になり、水も沁みだして滑る。草も生えていないつるつるの急斜面を何とか踏ん張って上り詰めるには手足の動きが見事に協働しなくては難しい。木に登ったり、横に置いた竹を渡ったり、木に吊したターザンロープで大きく揺れたりするのも、身体を使いこなす格好のトレーニングである。



崖登り

現在の子どもたちは、小学生の、それも低学年から「少年スポーツ」のクラブに入る。野球やサッカーのクラブで本格的な練習をするが、これは身体の全面的な発達という見地からして必ずしも望ましいことではない。特定のスポーツ競技の身体の使い方には、野球にしてもサッカーにしても偏りがあり、決まった筋肉しか使わない傾向がある。幼少期にはスポーツ種目に特化される前の原体験としての遊びが重要である。遊びの中には多種多様な動きが含まれていて、それがだんだん純化され、整理・統合されてスポーツになっていく。現在の子どもたちは早くスポーツに入りすぎなのである。スポーツ以前に、走ったり・跳んだり・登ったり・くぐったり・転がったり・落ちたり、いろいろな身体のこなし方を体験すべきであり、それは自然との遊び中にこそ豊かにあるのである。



斜面を転がる

子どもたちの自然遊びは、中国古来の陰陽五行説の概念を借りれば「火、水、木、土」の遊びである。宇宙の万物は「木火土金水」の5つからできているというのが五行説だが、その中でも子供時代は「金」をのぞく四行が重要である。これらは子どもたちが宇宙とふれあうための原体験なのである。

まず初めは水遊びである。ごく幼い赤ん坊のうちから、風呂の水を撥ね散らかして子どもたちは大喜びだ。この水と土が交われればどろんこ遊びとなる。幼児たちは土と水があれば日がな一日遊んでいる。手で泥をこね回しさまざまな形を作っていく。その表情は大地に生きるものの喜びにあふれている。土と水こそは自然の原形質であり、やがて土から芽生えるものに関心を持ち、草花を愛で、自然を尊ぶ心が育まれて行く。

続いて登場するのが「木登り」に象徴される冒険遊びである。高い木に取り付いたら、木の形に合わせて手足を上手に連動させないと木には登れない。高く上れば眺めはよくなるが怖さも増す。それに耐えて大きな木と親しみ、木と友だちになる。木は春には花を、夏には木陰を、秋には木の実を恵んでもてなしてくれる。木の実を探し、木に登って取ってきたり、棒で実を打ち落としたりするのも重要なカリキュラムである。

火を扱うことも重要な体験である。何しろ人間の文明は火をコントロールすることから始まったのだ。秋の終わりに落ち葉を集めて火をつける。パチパチと爆(ハ)ぜる炎、手をかざせば暖かい。子どもたちは火の回りに集まって歓声を上げる。火をいじってみたいのだが、まかり間違えば火傷をしかねない。巧みに火をつけ、上手に燃やすには修練がいる。そこには大切な生きる技術が含まれている。

残念ながら今の子どもたちは、土と水はともかく、木と火から遠ざけられている。公園の木には登ってはいけないうちになっていくし、手頃な雑木林は周辺にない。火に至っては「生火」に出会う機会は滅多にない。大学生になっても手際よく焚き火を起こすどころか、マッチさえも

もに擦れない若者が大半なのである。それで真っ当な人間になれるのかと大きな危惧を抱かざるを得ない。

3. 自然体験と心の発達

●自然との距離を縮める

「自然」と言うときに、我々大人は、ひとつのイデオロギーを持っている。「自然は美しいものである」という観念である。「大自然」という言葉を聞けば、NHKテレビの自然番組が思い出され、雄大で神秘的な美に満たされた自然のイメージから離れられなくなる。しかし、こうした感じ方は実は自然の実相から距離を置いた感傷的な自然観である。それは、人間にとって都合のいい、やさしく美しい自然だけを見ようとする人間の独善に過ぎない。実のところ自然は美しいどころか大体において汚い。泥んこも糞もふんだんにある。人間に優しいどころか、雨が降り雪が降り嵐も吹き荒れ、酷暑から極寒まで人間を痛めつける厳しい自然が常態である。大人の自然は自然の汚さや厳しさを捨象した絵空事の自然に墮している場合が多い。



雪すべり

結局、大人たちは自然を外にあるものとして対象化して捉えているのである。国立公園の第1級の自然を見れば最大級の賞賛を惜しまず、その保全を説く人々も、都市周辺の里山にはそれほど評価は与えない。確かに自然は人間界の外にあり、鑑賞や評価の対象であり、場合によれば破壊や改造の目標にもされてしまう。しかし、大人たちは忘れている。われわれ人間自体がまた一つの自然であることを。われわれも一個の生き物であることに違いなく、大気を呼吸し、水を飲んで流し出し、食べて排泄し、身体の中では血液が循環し、細胞は日々変化を遂げている。われわれの身体には別種の生き物である細菌や寄生虫やバクテリアが取りついている。その中には大腸菌のように居なくては困る協力者もあるし、厄介者であるはずの寄生虫さえもそれなりの存在価値があるようだ（最近の過剰なアレルギー反応は寄生虫を駆除しすぎたせいではないかという意見もある）。われわれの身体はすでに自然に組み込まれている。人間もまた自然の一部であり、自然の大きな動きの中で否応なく動かされ、生き、そして死んでいく。そのことを忘れて自然を支配していると思うのは人間の思い上がりでしかない。

子どもたちは自然を対象化しない。自然はそのまま子どもたちの中に入って行くし、子どもたちの方からも誰に言われなくとも自然に溶け込むことができる。彼らは自然とひと続きなのだ。自然のエネルギーを受け止め、それを糧にして自らの成長を実現していく。自然との交感や交流があってこそ、身体も心も豊かに育っていくのである。自然を遮断した人工的な環境の中では、内なる自然は成長の方向を見失い、サイボーグ（機械人間）のようなグロテスクな人間が育って

しまうだろう。

さんさん幼稚園の子どもたちはまことに「しぜんに」自然の中に飛び込んでいく。そしてそれぞれの子どもたちに即した仕方で自然と楽しくつき合う術(スベ)を身につけていく。雑木林や野原での多様な遊び、草花や昆虫や小動物(カエル、ヘビ、タヌキ、モグラなど)とのつき合い、崖登りやターザンロープのような冒険遊びに至るまで、この幼稚園の子どもたちの自然遊びは多彩かつダイナミックである。そこに働いている原理は、外にある四季折々の自然と子どもたちの身体の中にある自然とが共鳴・共振しあうことである。

子どもたちにも、もちろん「美しい」ものへの感受性がある。春の山道にタンポポが絨毯を敷き詰めたように咲いていれば「ワー、キレイだ」と歓声が上がる。同時に彼らはタンポポの茂みに殺到して花を摘み花束を作る。大人のように美しい物を距離を置いて鑑賞するのではなく、美もまた好奇心の対象であり、美しいものと格闘してそれを我が物にする。美しいものだけではない自然の不思議さやおもしろさに食欲に掴みかかる。自然のまっただ中に入り込んで自然との距離感を縮めていくことが幼少期の自然体験のポイントであると思われる。

さんさん幼稚園の子どもたちの好きな秋の遊びに「落ち葉のプール」がある。地面に大きな穴を掘って、その穴を雑木林から集めた落ち葉で一杯にする。そこへジャンプして飛び込む。深い落ち葉は子どもたちを受け止めて、あたかもプールのように落ち葉の海を泳ぎ回ることができる。最後は子どもたちは全身を落ち葉の中に沈めてじっとしている。これが楽しいのは、あたかも自分が大地の一部になったような感じがするからなのだろう。われわれの中にある自然と外側の自然とを交流させ交歓させるということが落葉に埋もれるという行為によって実現されるのである。



落ち葉のプール

●ケンカと残酷体験

子どもの心を養う上で、さらに重要な意味は自然の中での「ケンカ」と「残酷体験」の中にあると筆者は考える。子どもの成長にとって欠かせない体験はケンカである。昔は「きょうだいげんかは鴨の味」と言い慣わしたように、きょうだいは必ずケンカする。それぞれが自分の意志を持って自己主張すればぶつからないはずはないからである。ケンカは楽しいことではない。そこで子どもたちもケンカしながらケンカを克服すべく努力する。譲りあうことを覚えたり、約束事を作ったり、相手の存在を認めたりするようになる。かけひきや取引の末にルールとマナーが成立する。ケンカは「他者の発見」のための必須のプログラムである。ケンカを通じて相手が分かり、ケンカを越えて友だちができる。「ケンカ友達」こそ本当の友達なのである。

ケンカの効用はもう1つある。攻撃性の馴化(ジュンカ)ということである。人間が本来持って

いる攻撃性は高ければ相手を物理的に抹殺する行動さえ引き起こす。これをいかにコントロールするかは社会生活を円滑に進める上で欠かせない課題である。ケンカがさほど深刻にならない幼児のうちに思い切りケンカを体験し、攻撃性を発散しておくことは大切である。小さいころに虫も殺さぬいい子であった子が、中学生になって残虐な殺人を犯したりするのは、小さいころのケンカ不足（ケンカの抑圧）に一因があるように思えてならない。攻撃性を飼い慣らし、自らをコントロールできるようになるために、攻撃性をスポーツへ昇華させることも重要である。スポーツ好きになるためにも、小さいころの身体遊びが大きな価値を持つわけだが、そうした遊び体験はどんどん狭められ、電子ゲームで擬似的に攻撃性を発散しているのが今の子どもたちである。そこに一種の病理を感じてしまうのは筆者の偏見だろうか。

さてこのケンカは子どもの日常生活のあらゆる場面で起こり、自然の中ばかりでないことは言うまでもない。むしろ、ケンカは室内のような閉じた空間で起こりやすく、自然の中では起こりにくい。いや、起こることは起こるのだが逃げ場が豊かにあるのでケンカが深刻にならずに拡散し、ただの遊びに変わってしまうことが多い。つまりは自然の中の方がケンカのような攻撃的な遊び（例えば戦争ごっこ）がやりやすく、全身を使って闘いあう体験を得やすいということである。

もう一つの「残酷体験」となると、これは自然の中でこそ豊かに、しかもおおらかに味わえる。チョウチョやトンボやバッタの羽根をむしったり、カエルの肛門から息を吹き込んだりする残酷な遊びは、かつての悪童たちには日常茶飯事であった。残酷遊びは大人の禁止事項に反逆するイタズラとともに「ワル」の遊びの二大メニューだが、ワルこそは遊びの魅力に不可欠の要素であった。大人たちは「よい遊び」を推奨し、悪い遊びの撲滅を図って止まないが、ワルこそは子どもの生のエネルギーそのものであり、生きる力の根源とも言える。もちろん子どもが社会化される過程で最終的には善なるものへの志向＝倫理感が形成されねばならないが、それは悪を単純に否定して得られるものではなく、むしろ悪を体験し、それを乗り越えてこそ得られる（乗り越えなければ得られない）。闇があるからこそ光の意味があるのである。



肩に乗った幼虫

ワルの遊びの中にはスリルとともに言いしれぬ恐怖があった。この「恐れ」から次元高い「畏れ」が生まれる。いたずらで叱られ、残酷な（虫や小動物が主な対象）行為を自ら悔やんではじめて、本当の善が体得される。善の背後にある「聖なるもの」が見いだされる。大人たちはこの機微を忘れることなく、遊びの中のワル体験に寛大になる必要がある。悪い遊びを禁止していい子のいい遊びばかりにしてしまっただけでは、実のところ真にいい子は育たない。

もう1つ、ワルとは反対側にあって重要なのが「夢とファンタジー」である。昔々のおとぎ話

の世界や魔法使いの森、あるいは「サンタクロースって本当にいるの？」という子どもの夢を大切にすることも心を育てる重要な教育である。夢は遊びの世界にふんだんにある。子どもたちの「ごっこ遊び」は夢と空想が成分である。砂場で土の造形をしたり、野原や森を駆け回することは、単純に身体を動かしているだけではなく、空想の世界が重ね合わされてさまざまな冒険を体験しているのである。子どもの心の中に豊かなファンタジーを躍動させるためにも自然という舞台は欠かすことができない。

4. 自然の中での人間関係

自然という場〈トポス〉は、そこで活動する人間たちの相互関係にも大きな影響を及ぼす。子どもたちの集団は、都会的な環境の中と自然の中とでは明らかに異なる様相を見せる。特に自然の中では異年齢集団が組みやすく、また、それにふさわしい活動プログラムを容易に見つけることができる。さんさん幼稚園の良さの1つは、年齢の異なる子どもたちの関わりが大切にされていることだと思われる。3歳児から5歳児までが、それぞれ子ども自身が名前を付けた、いくつかの小グループに分かれてわいわい賑やかにやっている。身体の大きさがずいぶん違う子らが額を寄せ合って相談している光景はほほえましい。



大きい子も小さい子も

一般に今の子どもたちの集団体験は同年齢集団に偏りがちである。クラスと言えば幼稚園からずっと同い年の子どもで構成されている。親しい友だちもだいたい同年の子ばかりだ。こうしたドングリの背比べの同質集団には「競争原理」が働いて互いに切磋琢磨しあうことになる。子どもたちのやる気を刺激して効率よく教育を行うには、競争原理の活用は確かに重要な方法に違いない。だが人が社会を組んで生きていくには、もう1つ大切な「協調原理」があることを忘れてはならない。人間同士がひとりひとりの違いを乗り越えて互いに助け合い、教え合うことを学ぶには、同質集団ではなくて年齢層の異なる縦の関係が必要なのである。

もともと地域の遊び集団は異年齢集団であった。それは「地域のきょうだい」ともいべき関係で、年長の子がリーダー（ガキ大将）となって子どもたちを率い、徒党を組んで遊び回った。さまざまな遊びの技術や遊び場や遊び道具についての知識と情報は年上の子どもから年下の子どもへと伝承され、子どもは大人の干渉を受けない自立した世界を持つことができた。そればかりか歳が行った子どもたちは幼い子どもたちの保護者的な役割を果たし、幼児が安全に過ごせるような心配りもあったのである。ルールがよく分からない（あるいは技術の低い）幼児を「みそっかす」として扱い、半人前だがそれでも一定の参加を許す仕組みはその典型である。しかし、現在の親たちは自分の子が大きい子と遊んでいるとイジメられるのではないかと心配し、逆に小さ

い子とばかり遊ぶとわが子は智慧が足りないのではと気にしてしまう。否である。年齢の落差という位置のエネルギーこそが、教え—教えられ、助け—助けられる人間的な関係を生み出す原動力なのである。

自然の中に置かれた子ども集団は、すぐれて協力的・協調的に活動する傾向が高い。メンバーを誰も孤立させず、メンバーの方から見ても集団の中に溶け込みやすい。もし誰かが孤立を望んでも「孤立したい」とよほど頑張らないとできないという感じがある。自然の中では外界からさまざまな刺激があり、楽しい情報もたくさん入ってくる一方で、不安や恐ろしさをかき立てる場面もある。それへ対処するためにメンバーは自ずと力を合わせる方向に進んでいく。閉じた空間や抑圧された場面では、一人一人の持つ攻撃性が弱いメンバーに向けられて「いじめ」が発生しやすいが、自然の中ではむしろ攻撃性は外へ向かい、内なる共同と協力が生まれるというべきであろうか（兄弟内にせめげども外その侮りを防ぐ）。

活動的な「タテの異年齢集団」をつくることができると、子どもの中から、小さい子の世話をする、面倒を見るという気持ちが引き出されていく。それはさらに障害を持った子どもたち（さんさん幼稚園には、ダウン症、自閉症、発達障害などいろいろな子が入ってくる）にも及んで、周りの子どもたちへの気遣いが生まれる。どんな子どもも孤立することはなく、自然に、それなりのとけ込み方をし、自分の「居場所」を見つけた。障害がある子にもその子なりのとけ込み方と位置づけがあることをみんなが了解する。これは自然の営み自体が持っているエコロジーの原理と何ら異なるものではない。

5. 自然体験を継承するための仕組みづくり

生活福祉学科の学生たちを見ると、明らかに二手に分かれる。非常にアクティブで、体験学習に積極的に参加し、さんさん幼稚園にも喜んでやって来て子どもと遊び戯れることができる学生と、身体を動かすことには消極的で、授業も講義中心のものを好む学生とがいる。前者の学生たちの多くは、幼い頃に自然活動の経験が豊かにあるようだ。実家が農家で、子どもの頃は稲刈りもしたことがあるという学生も少数ながらいるが、そういう学生は自然の中ではまことにイキイキとしている。他方、都会的で繊細だが、対人コミュニケーションが活発ではなく、自分の殻に閉じこもりがちで、ひ弱な学生もだんだん増えてきた感がある。そして、そういう学生たちに尋ねてみると、その父母の自然体験があまり広くなかったのではないかということが推測される。親の行動様式が甚大な影響を子どもに与えることを考えると、このままでいくと、日本の母親は、ますます子どもを野外に出さない——そんな危ない所に、そんな汚い所に、あるいは何が起こるかかわからないような恐ろしい場所に子どもを行かせるわけには行かない、と考える母親が増えて行くであろう。これまでの母親世代の自然体験を、これから補填することができない以上、何らかの手だてを講じないと、子どもの自然離れは決定的になり、子どもをキャンプに送らない時代になってしまう。現にその傾向がはっきりしてきた。

親自身が必ずしも野外活動体験が豊富でないとすると、求められるのは、子どもの自然体験ばかりでなく、親子で参加し、ともに楽しむことのできるプログラムということになる。さん

さん幼稚園では、そういう視点から積極的に親子自然体験を推進してきた。まずは「春の園庭散歩」と称する里山ハイキングがある。園の活動エリアになっている里山は、南北2 km、東西1 km 半、およそ3平方 km (300ヘクタール、約100万坪)の広さがあり、クヌギとコナラに代表される雑木林と畑と野原、谷戸の田んぼが織りなす変化に富んだ景観が広がっている。新緑の萌える4月の里山を弁当持ちでのんびりと歩くだけで、参加したファミリーのほとんどが自然愛好家に転向してくれる。この「園庭」をフルに活用して、自然観察、ウォークラリー、オリエンテーリングなどの野外活動を四季折々に展開し、崖を登るレースを取り込んだ「里山アスレチック」というイベントも行って来た。

園の行事や里山のイベントに親たちを呼び込んでいくこと、それも単なる義理で参加するのではなく、親自身も心底「楽しい」と感じることでできる行事をつくることによって、親たちのコミュニケーションが育ってきた。母親中心の文化活動(人形劇や音楽サークルなど)も盛んだが、父親の飲み会から始まった「オヤジの会」も、一種の異業種交流の場となって人気を博し、それを土台に園のもろもろの行事への参画体制が整っていった。春のお花見の大宴会や秋に焚き火でパンを焼く「遊ぼうパン」の火守や、大運動会の仮装応援団や、冬の日の餅つき隊などはオヤジの会の専管事項になっている。その活動の中で、オヤジたちは自主的に夏の合同ファミリーキャンプに取り組むようになった。毎年夏休みに行われる奥多摩の大自然を楽しむキャンプは、現在では20-30家族が参加する一大イベントに成長した。こうして、それぞれの家庭の1年のカレンダーに、「さんさんライフ」なるものが単なる子どものレベルを越えた一家の行事として定着して来た。

親たちとともに子どもの自然体験を継続的に追求する仕組みとして、2003年には「NPOさんさんくらぶ」をスタートさせた。これは幼稚園を卒園した父母の有志を核に組織したもので、里山保全や青少年の自然体験活動、地域のスポーツ・レクリエーション・文化・学習活動、地域福祉に関わるボランティア活動などに取り組むことを目標に掲げ、60名ほどの会員で運営している。中核になる事業として小学生の「里山自然学校」を開講し、里山を舞台に月例会を行っている。自然観察をはじめ、自然の中でのアート創作、里山キャンプ、前述のアスレチックなどに取り組むほか、2年前から谷戸の田んぼを借り受けて稲作にも挑戦している。数10名の子どもと大人が泥田に挑む田植えや稲刈りには、ほとんど祝祭的と言ってもいい喜びがあるし、農薬を使わない稲作は収量は多くはないが、田んぼにカエルやドジョウがもどり、初夏の田んぼにはホタルの乱舞も見られるようになった。



田植え

6. 都市周辺の自然環境の活用

幼少期の自然体験を広げる場所を都市近郊に確保することはできないだろうか。それは必ずしも困難なことではない。日本の国土の3分の2は山林で、緑の比率は「森と湖」のフィンランドについて高い。中央部の山地だけでなく、都市の周辺にかなりの森林が残されているし、規模が小さいものなら都市の中にも緑はある。現に人口20万人の多摩ニュータウンの南側には、ここで紹介した小野路の里山が広がっている。民俗学的に言えば、「さと」とは人の領域、「やま」は神の領域になるが、「里山」は神と人の出会いの場であり、両者が手を携えて自然の恵みを引き出す作業場である。四季を通じて楽しめるクヌギやコナラの雑木林や、小さな田んぼが段々に連なる谷戸の景観は、私たちの先祖が長い時間をかけて自然と関わり合いながら作り上げた共同作品である。

巨大な団地群が連なる多摩ニュータウンの南側の尾根（最近尾根沿いの遊歩道にわれわれの仲間が付けた「横山の道」という名称が定着して歩く人が増えた）を越えると、風景は一転して懐かしい里山が広がる。しかし、現在では雑木林も谷戸の田畑もほとんど手を入れられることなく荒廃している。代わって道沿いにはアパートやマンションが立ち並んでかつての面影は薄れてしまった。「さんさん幼稚園」がスタートした頃は、里山はもっとそれらしく、タヌキも夜な夜な徘徊し、キジもコジュケイも健在で、元気な鳴き声を山に響かせていた。谷戸の田んぼには青々した稲の行列が整然と風になびいていたのだ。



里山キャンプ

北側のニュータウンでは味わえない自然との豊かな交感という営みを、わずか2、3キロ南の小野路の森で、再び取り戻すことは不可能ではない。そのためには自然の奥深さへの尊敬の念と多少の知識といささかの汗とを合わせて楽しい運動を起こせばよい。ただし、国立公園のような高度な自然地ならば、所有者が国や自治体である部分が多く、公共的な使われ方をしやすいが、都市の近郊の自然はすべて個人や企業の私有地である。雑木林がアズマネザサの藪になっていても、畑が放置されて雑草が生い茂っていても地権者の許可なく勝手に入り込むわけにはいかない。これを自然体験の場として生かしていくには、「まちづくり」という視点が必要になる。残された自然を大切に、子どもにとっても、勤労者やリタイアした高齢者にとっても、自分を生かす場として使い込んでいくこと、それが地元の人々にも大きな利益になることを理解してもらい「まちづくり運動」を起こすことが求められる。

地域の中を歩くと、放置された野原や雑木林を見つけることができる。地権者を捜し出してその利用を願い出ても必ずしもよい返事をもらえるわけではない。その時に「子どもの健全育成」という趣旨を前に出して、「あそこにステキな林があります。これを子どもの遊び場にして

木登りなんかさせてもらえないだろうか」と当たってみるのが成功率が高いように思われる。現在の子どもたちが自然との関係を絶たれていて、その回復こそが子育てのポイントであるという見解は、自然の豊かな場所に住む人には説得力ある論理である。

われわれの周りにはたくさんの子どもがいる。また、探してみればそれなりの自然が身の回りにはある。その子どもたちと自然とを結び合わせて小さくても新たな動きを創り出したい。子どもの教育を文科省や教育委員会任せにしておくことはできない。われわれ市民が自分たちの活動として取り組んでこそ、行政も動き、社会も理解を示すのである。

<参考文献>

日本子どもを守る会編『子ども白書』草土文化

毎年、児童と青少年を巡るさまざまなテーマを取り上げて報告している。子どもの体力の低下についても毎年データが載せられている。

小笠原浩方『すきまにあそぶ子供たち』斗夢書房 1985年

子どもは時間と空間の隙間に遊ぶとして、大人の考えた遊び場の限界を指摘する。子どもを延ばすプレイスクールの実践とそれを支援するプレイリーダーの役割を説く。

山田桂子『「待ち」の子育て』農山漁村文化協会 1986年

自然の教育力が子供の自立にとっていかに重要であるかを力説し、子供同士の育て合いを促す「待つ保育」の意義を明らかにしている。静岡県島田市の「たけのこ保育園」の楽しい実践が豊富な写真とともに紹介されている。

今泉みね子、アンネッテ・マイザー『森の幼稚園ーシュテルンバルトがくれたすてきなお話』

合同出版 2003年

ドイツの「森の幼稚園」の活動の様子を物語仕立てで紹介した本。子どもたちの気持ちに即して自然とのふれあいの豊かさが示されている。

岡部翠編『幼児のための環境教育 スウェーデンからの贈りもの「森のムッレ教室」』

新評論 2007年

スウェーデンではアクティブな野外教育の推進が1892年以来、国民的規模で推進されている。「森のムッレ教室」は1957年に創設された野外保育の場で、その内容と効果を紹介するとともに、近年広がっている日本でのムッレ教室の実践を報告している。